

日中科学技術

No. 57

1988. 10. 20

発行所
日中科学技術交流協会

〒113 東京都文京区湯島1-7-11
南新ビル6F TEL.(03)815-7241

昭和63年度定期(第13回)総会開催報告

昭和63年7月15日(金)午後2時30分から4時の間千代田区神田錦町学士会館302号室において、本協会の昭和63年度定期(第13回)総会を開催しました。

会員総数340名に対し、委任状提出者を含め計193名の出席者を得て総会成立、開会しました。

会長を議長に選出し、議長の就任挨拶ののち、坂部知平・春原亘両会員を議事録署名人に選び、以下の議事及び意見交換が行われました。

1. 議事

(1) 第1号議案

- ① 昭和62年度事業報告
 - ② 昭和62年度収支決算報告
 - ③ 昭和62年度監査報告
- } 別冊・
 会員送付

先ず①について原案が朗読され、会長より説明があり、引続いて窪田理事から②について説明及び報告が行われました。

若干の質疑応答の後、これらの報告は全会一致で承認されました。

(2) 第2号議案

- ① 昭和63年度事業計画(案)
 - ② 昭和63年度収支予算書(案)
- } 別冊・
 会員送付

先ず①について原案が朗読され、会長より説明があり、引続いて窪田理事から②について説明及び報告が行われました。

若干の質疑応答の後、原案は全会一致で承認されました。

2. 開会 午後4時

日中科学技術交流協会創立10周年記念 日本—中国 生物科学シンポジウム 「分子レベルにおける生体機能の調節・制御」

日中科学技術交流協会と中国科学院の協議にもとづいて、日本—中国生物科学シンポジウムが、1987年12月15・16日の両日、中国上海市において日中科学技術交流協会創立10周年記念行事のひとつとして中国科学院のご厚意により開催された。

- 山崎 真狩 東京大学農学部教授
- 遠藤 章 東京農工大学農学部教授
- 魚住 武司 東京大学農学部教授
- 宮川 都吉 広島大学工学部助教授

磯貝 彰 東京大学農学部助教授
鈴木 昭憲 東京大学農学部教授・協会理事
一行は、12月14日に訪中、上海市の中国科学院上海生物化学研究所で開催されたシンポジウムに参加後、蘇州市・桂林市・広州市を訪問し、香港経由で12月23日に帰国した。なお鈴木理事は、12月18日、ひとあし先に帰国した。

シンポジウムは、16日中国科学院上海生物工程中心の孫玉昆教授の開会の挨拶で始まり、17日 鈴

木理事の閉会の挨拶で幕を閉じた。

発表と討論は英語で行われたが、比較的にこじんまりとしたシンポジウムのため、言葉が障害となることもなく活発な討論が行われたことは喜ばしい。

孫教授以外の中国側の講演者は、以下のとおりである。

孫 偉 上海生物化学研究所
匡 達人 上海細胞生物研究所
周 光宇 上海生物化学研究所
楊 勝利 上海薬物研究所
李 載平 上海生物化学研究所
冷 麟 復旦大学生物化学科

(講演順・敬称略)

本シンポジウムは、提案から実施まで僅か6ヶ月余りという慌ただしさであった為に、中国側の参加者が上海地区の研究者に限られていたにもかかわらず、生物科学の先端の研究成果が報告され内容の充実したシンポジウムであった。

中国科学院国際合作局 崔 泰山副局長、張松林幹部、上海生物工程中心 孫 玉昆副所長、中国科学院上海分院 張 申培副院長、万 鐘漢主任、開 建偉幹部、中国科学院上海生物化学研究所 林 其誰所長、趙 鳳仙女史を初めとする関係者の方々に格別のご配慮とご努力とにより、日中双方の生物科学研究者にとり、きわめて有意義なシンポジウムがもたれたことを感謝したい。

〔本会派遣訪中団報告〕

また行ってみたい中国

東京大学農学部 山崎真狩

1987年12月15・16日、上海において行われた生物科学シンポジウム「分子レベルにおける生体機能の調節・制御」(日中科学技術交流協会・中国科学院共催)に参加させて頂いた機会に、再び中国を訪れることが出来た。

本シンポジウムは、鈴木昭憲東京大学農学部教授と孫 玉昆中国科学院上海生物工程中心(バイオテクノロジーセンター)教授のお世話で組織され、素晴らしい交流の成果が得られ、シンポジウムは大成功であった。特に孫教授とは研究内容が近く、親しくして頂いた。鈴木教授がシンポジウムに関しての報告書を書かれるので、その後の旅行についてご報告したい。

18日早朝、鈴木教授とお別れして、我々日本側参加者(遠藤 章、魚住武司、磯貝 彰、宮川都吉の各先生と私)と通訳の張 松林さん(中国科学院国際合作局・北京)の6人で上海より桂林に向った。約3時間の飛行機の旅であった。桂林に

行けるようにして頂いたのは鈴木教授の格別のご配慮である。「桂林の山水は天下に甲たり」と言われるそうで、是非とも行ってみたい所のひとつであった。

広西チワン族自治区にあるため小さな観光地ぐらいにしか思っていなかったが、どうして人口38万の地方都市でデパートもあれば市の中心部の城跡には師範大学まであった。名の通り街には、桂花樹(キンモクセイ)の並木が至るところにあった。北緯25°にあり、日中はセーター姿でも寒くない。日曜日が入るというスケジュール上の都合もあり、桂林に3日いることになったが、毎日新たな感激があった。市中に林立する石灰岩の奇峰、多くの洞くつや鐘乳洞は見あきない。

最後はハイライトの漓江下りである。夏期は桂林から陽朔までの約6時間、冬期は水量の関係で途中の楊堤から陽朔まで20km、約3時間の舟旅でかつては誇張と思っていた墨絵の山水画そのまま

の奇峰の連続である。このような雄大なカルスト地形は、大古生物(サンゴ虫等)が海水の炭酸ガスをCa⁺イオンとともに石灰岩として固定堆積した部分がいつしか隆起し地上に現れ、雨水で溶脱されて残った部分だという。漓江下りは、40元(1元約40円、外国人は80元)と聞いた。平均月給100元というからかなりの料金と言えるが、その価値は充分にある。



漓江下り。右より遠藤氏、筆者、宮川氏、魚住氏(磯貝氏撮影)

桂林から再び飛行機で広州に向った。約45分で広州に着く。広州は交易会でも有名な国際都市であり、上海より更に豊かでアカ抜けている感じである。我々の滞在した12月21・22日頃、日中の最高気温は21度という暖かさであった。中国科学院広州分院の熊 国炎さんが出迎えてくれた。専門は地理学だそうである。広州では市の南側を流れる珠江、古寺の六榕寺、それに私共の希望で自由市場を案内して頂いた。

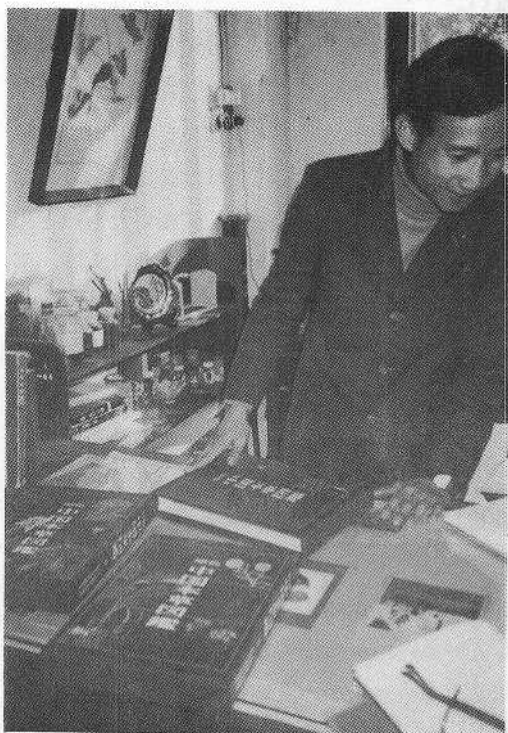
張さんによれば、中国科学院の招待客の中で自由市場の見学を希望したのは初めてのことだという。広州市内にいくつかある自由市場の1つを見たが、漢方薬材料のみを扱う店の並ぶ通り、農産物の通り、魚類の通り、肉類の通りがいずれも売台1つのごとき質素な店の連続であるが、品物は多くアメ横のようにその人ごみと活気はものすごいものである。食の広州の台所である。肉類の通りは獣類の内臓も平気で並べてあり、活気の上にとぎつさも加わるので気の弱い人にはおすすめで

きない。

次の日、華南工学院と中国科学院華南植物研究所を訪問した。華南工学院食品工程系(食品工学科)の郭勇副教授はユネスコ研修生としてかつて私共の研究室に約9ヶ月在籍されたことがあり、この事情を汲んで訪問先に設定して頂いたものと思われる。中国の総合大学としては、北京大学、南開大学(天津)、復旦大学(上海)、中山大学(広州)などが重点大学であると聞いたが、華南工学院も工業大学として重点大学の1つだそうである。敷地200ヘクタール、美しい大きな池もある仲々立派な大学で、学部学生9000人・大学院生1000人が在籍している。郭先生のほか、食品工程系の袁振遠教授、同工程主任の彭 志英副教授の歓迎を受けた。同系にはバイオテクノロジー研究所も付属している。同系の微生物学学生実験室(30人分)を見せてもらったが、実験台は白タイル張りで清潔であった。顕微鏡も30台あり、我々のところの3人に1台よりも恵まれている。しかし研究室の設備は古いものが目立ち、これから充実させてゆくことになろう。昼食を大学会館でご馳走になった。大なまざる姿むしのようなものが出て来て、さすがに広州とうなった。

午後は華南工学院から比較的近い華南植物研究所を訪問した。ここは鈴木教授ご推薦の研究所である。副所長の呉 七根博士が研究所と付属植物園をずっと案内して下さった。3時間半に及ぶ間、熱っぽく流暢な英語で説明して下さい、そのご好意には頭が下った。

同研究所は分類・形態・植物化学・生態・生理遺伝の6部分、テクニシャンを含めて334人の研究者を擁する。ここの植物標本は70万点に及ぶということであるが、その標本室の広大さと立派さには驚かされる。この研究所と日本側研究者が日中共同という形で原色中国本草図鑑(雄渾社、全8巻)をつくりつつあるところだそうで、既出版の部厚い数冊を見せてもらった。付属植物園は、敷地300ヘクタール、450種の植物を集めており中国で最も大きい植物園の1つである ソテツ園、



原色中国本草図鑑を説明する呉 七根
華南植物研究所副所長

ラン園、竹園など、これも見てゆけ、これも見てゆけと熱心に推めて下さり、ついに予定の時間を30分も超えてしまったが、呉副所長は本当に温かいさわやかな学者であった。中国旅行の掉尾を飾るにふさわしい訪問先であったとは皆の一致した感想であった。時あたかも冬至であった。冬至は中国では大きな年中行事の日だそうで、帰りの車中あちこちで爆竹の音を聞いた。

10日間の旅で中国料理は最後まで食べあきなかった。上海シンポジウムのあと6日間も楽しい旅を続けさせて頂けたのは中国科学院の絶大なご好意によるものである。最後に張さんにお礼を申し上げたい。北京に奥さんと子供さんを残し、私達と行動を共にして下さったから、常に楽しく、全てがうまく行った感じがする。

〔本会派遣訪中科学者報告〕

中国の誘電材料学瞥見

東北大学名誉教授 池田 拓郎

5月9日、成田を出るときは、自分の旅程を一切知らなかった。北京空港に出迎えてくれたのは声学研究所の朱厚卿さんであった。彼の話で、15日まで北京、その後上海に行くことになっていることを知った

10日、声学研究所の所長関定華先生から概要をうかがった後、関係の部門を見学した。大きな音響水槽があり、朱さんはトランスジューサーの仕事をしている。圧電セラミックスをはじめ、NbO₃、BGO、BSOなどの結晶も育成し、SAWの仕事もしているが、私は今迄このグループのこと

を知らなかった。目新しいこととしては、Zn₃Nb₂O₈の圧電結晶を見、又、加速度計方式のd₃₃測定器を見た。その夜は、関先生の夕食への招待を受けた。

11日に、私の準備したテーマのうち、誘電材料学の二、三の話題及び圧電結晶の機械的損失の二つの講演をした。講演は英語でやり、中国語に通訳された。12日には、朱さんのグループ、朱、陳荘などの諸氏と討論した。

その他の時間は、北京市内の観光、蘆溝橋、長城、明陵などにも行った。案内は、日本語を話せ



北京声学研究所, 所長関先生と対談



同上, 討論の場, 左より陳・朱・莊諸氏・筆者

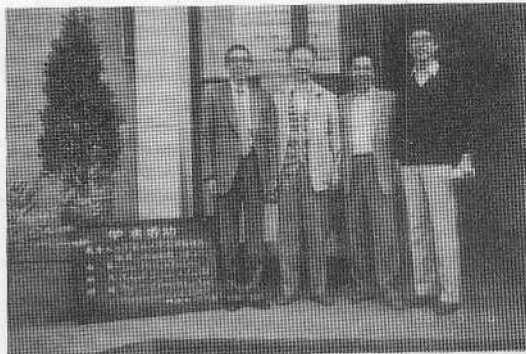
る王、盧さんが同行することもあった。

15日に上海に移動し、16日、上海珪酸塩研究所を訪れた。出迎えたのは羅維根さんで、以前に仙台で面識を得ており、今回常に世話をしてくれた。副所長の王永令、及び殷之文の両教授に会った。多少の説明の後、所内見学に移った。

この研究所のことは、私の専門分野にも近く、又、殷先生からは何回か年報の供与を受けているので大半のことは分っていた。陳列室には、結晶やセラミックスが展示してある。所内のテーマは多くの分野をカバーし、大抵のことはやっているという感じがする。殊に、応用を明確に指向しており、例えばセンサーを挙げる。一寸面白かったのは、メルトからの結晶成長を観察しながらビデオにとっていた。やっていたのは、東北大金研に留学していた金さんであった。

午後、線型結合の結晶学と誘電材料学の二、三の話題の二つの講演をした。質問の主なものに、誘電体研究、特にセラミックスの動向はどうか、圧電材料 $\text{Li}_2\text{B}_4\text{O}_7$ を作っているが将来性はどうかなどがあつた。

その夜、殷、王両先生の夕食への招待を受けた。17日には蘇州観光をした。



上海珪酸塩研究所で講演終了後、右より羅氏・王先生・殷先生・筆者

18日午前、上海応用物理所を見学した。案内役の陳拳新さんは、TGS, LATGS の大きな結晶を作りパイロセンサー（特に赤外用）をやっている。分光部門では赤外、ラマンをやっており、主に化合物半導体を対象としているが、例の高 T_c 超伝導体も扱っていた。

当日は、上海市内観光をし、19日に帰国した。

北京で泊った友誼賓館は西北の文教地区にあり、科学院の諸研究所にも近く、外人が多く泊っていた。食事の時、同卓の人々と話を交して、その殆どが科学者で、しかも米国から多くの人が渡中していることを知った。その一週間、日本からは私一人であった。会話は英語でなされ、又、中国科学者との対話も英語でなされるから、四六時中英語ですみ、多少学んで来た中国語は要がなかった。上海の静安賓館では外人は多くはなかったが、朝会う外人はやはり米国が多い。この10日間の些細な経験だけからも、中国の眼は明らかに米国に向いている。日本はあてにされてはいない。

上にも触れたが、彼等自身のテーマは目的意識

が明確であり、又、質問も、これからの研究の傾向はどうか、この現象は何かに応用されるか、この物はやっけていて使い物になるだろうか、などである。これに答えるには、米国流のプラグマティズムの方が向いている。少くも何らかの答を明確に返すと思われる。学問をやる態度としてどちらがよいかなどを問題にするつもりは私にはない。同様の印象は、中国が日本に留学生を送る前に、先ず、貴学に受入れる学科があるかときいて来るときに感じている。その挙げる項目が、実際的な知識を求めているということである。中国は、封建時代の重圧を最も長く受けた。解放後の中国は、

追いつけ追いこせと、真剣であり、勤勉である。日本が、曾て昭和30年の前後に、米国に学ぼうとして一生懸命であったその時代に似ている。

このようなことを考えると、我々が中国に対する場合、中国が本当に求めているものは何か、それを先ず適確に知る必要がある。そして、それに適当な人を、それも一級の人を、更にいうならもっと多く、送り続けないと、日本は、再び、中国の善き隣人たる資格を失うかも知れない、と、密かにおそれる、というのが、訪中の感想として述べたい事柄である。

〔本会派遣訪中科学者報告〕

生物学訪中記

元関西医科大学教授 柴谷篤弘

旅程：1988年5月15日 0925 大阪発(JL755) 1255 北京(Beijing)着；5月20日 1205 北京発(CA4122), 1520 昆明(Kunming)着；5月23日 1630 昆明発(CA4341), 1730 広州(Guangzhou)着；同日 2200 広州発(海路：星湖輪), 24日0700 香港着；同日 1430 香港発(JL702), 1820大阪着
日程：5・15(日) 袁徳成(Yuan Decheng) 博士(北京動物研究所)等英日通訳2名の出迎え。宿舎は、友誼賓館(Friendship Hotel)。

5・16(月) 北京動物研究所を訪問。研究所の組織、活動状況、概要をビデオで了解。5月訪問を指示された文通上の同学李伝隆(Li Chuanlong)教授は、ずっと野外調査に出発して不在、私の訪問目的のひとつ、中国の蝶類の標本のなかの、注目すべき部分の閲覧は、同教授の研究室が閉鎖されていて実現しなかった。昆虫分類学部門の黄復生(Huang Fusheng)教授と方承業(Fang Cheng-lai)博士と談話、将来の研究協力の望ましい形について討議し、了解に達した。この研究所の細胞

生物学部門の陸中定(Lu Zhongding)教授、昆虫生態学部門の趙成華(Zhao Chenghua)教授から研究内容の説明をうけ、討議のうえ、将来の援助の可能性を検討することができた。

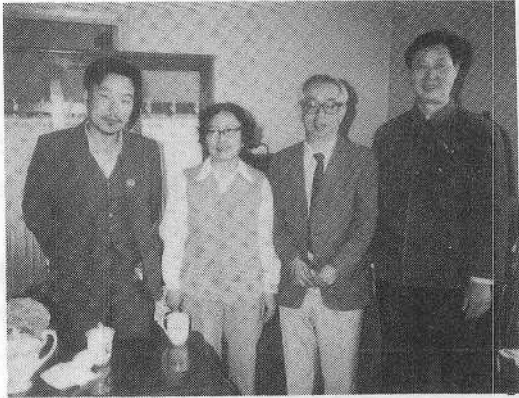


北京動物研究所所長 劉樹森博士(右)と筆者

5・17(火) 長城のある八達嶺(Badaling)の裏側の植生のゆたかなところで、昆虫、主として蝶類の観察と採集。

5・18 (水) 植物園訪問。動物研究所の李典謨 (Li Dianmo) 副所長等の招待で市内で晚餐。

5・19 (木) 動物研の所長劉樹森 (Liu Shusen) 教授に会い、謝礼をのべ、最後の詰めをする。



北京動物研究所昆虫分類学部にて
左より袁徳成氏、方承萊氏、筆者、黄復生氏

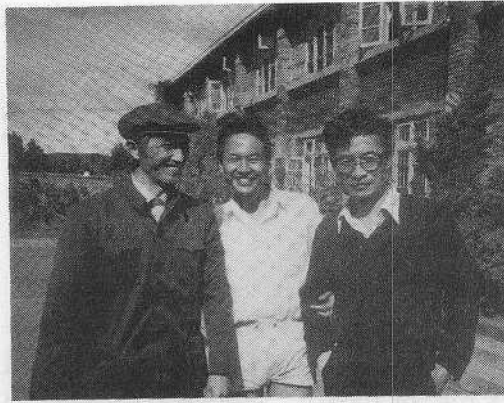
5・20 (金) 通訳の袁博士と将来の協力についてさらに意見を交わす。昆明では昆明動物研究所所長施立明 (Shi Liming) 教授秘書、楊虎 (Yang Hu) 氏が空港への出迎え、英語の通訳をはじめ万般の世話に有能さを発揮してくれた。宿舎は昆明飯店。

5・21 (土) 動物研究所で昆虫分類学部門の趙万源 (Zhao Wanyuan) 教授、霊長類学部門の彭燕章 (Peng Yanzhang) 教授、趙昌廉 (Zhao Changlian) 博士、細胞遺伝学部門の施所長と会談。

その日の午後および5・22 (日) 楊氏の案内で市周辺をめぐる、照葉樹林の保存および破壊の状況を昆虫相の観察を通じて行い、多くの示唆をえた。

5・23 (月) 広州では中国科学院の地理学者熊国炎 (Xiong Guoyan) 博士の出迎えをうけ、乗船までの短い間に広州の科学研究機関について説明をうけ、研究協力のための基礎的知識を得た。

感想：第一線の若い科学者でも、有名な中国科学史家 Joseph Needham 博士の名を知らぬ人があり、また日本をふくむ世界各地で現在盛んに行わ



昆明動物研究所にて
左より趙成華氏、楊虎氏、趙昌廉氏

れている進化生物学論争のことも知らないようである。従って私の目的とした構造主義生物学について連絡をとる必要性は感じられなかった。

現在中国の科学技術者は、経済的效果のある研究に追いつてられている感じで、研究者による合資会社 (公司) 設立が盛んである。基礎研究者は、研究費の不足に悩まされているようで、それだけ日本からの協力を求めているらしい。動物学については、霊長類など中国に特産するものを用いて、ユニークな研究をやり、それを資源化しようとしている。

中国の科学者との交流には、英語が必須のようで、日本語は、わが協会の事務範囲をでると、通常役に立たなくなる。日本語の通訳は費用がかさみ、そのうえ科学的な話題をうまく扱えない。

私は海外生活が長かったために、この点困難はなかった。中国科学院の各部門のあいだの連絡は悪く、私自身も旅行の日程も知らされず、また両研究所とも訪ねてくる私について、中国科学院本部からなんの情報も与えられなかったという。私のほうで、招待がきまったあと、個々の研究所・研究者に手紙を書いておくべきだったのだろうが、こちらも先方について情報不足で、思うにまかせなかった。しかし一度このようにして、中国にかけたあとは、すべてやりやすくなった。今後の協力にそれを生かして行きたいと思う。

〔本会派遣訪中科学者報告〕

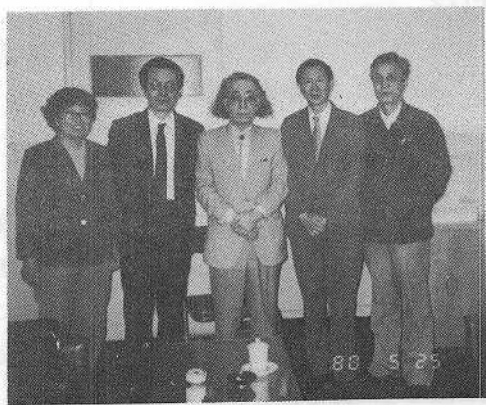
社会地球化学交流の旅

東京都立大学名誉教授 半谷 高久

本協会のおかげで、私は去る5月24日午後生まれて初めて北京の地を踏んだ。空港で中国科学院の方の出迎えを受けて、早速宿舎の友誼飯店に向った。北京は5月が一番美しいとガイドブックに書かれていたが、確かに空港から市街への道はきれいな緑が冴え、東京で予想していた北京とは違っていた。百聞は一見に如かずの感を改めて深くした。

私の今回の訪中目的は2つあった。

第1は、現在私と秋山紀子博士とが共同してその研究方法論を開発している「社会地球化学」の考え方を理解してもらい、その同志を拡大することである。第2は、私のルートを利用して日本と中国の研究者との連絡を何らかの形で強化することである。



中国科学院生態環境研究中心にて(北京)、左から高副教授・浦副教授・筆者・庄教授(所長)・王教授

「社会地球化学」と題してのレクチャーは、北京の中国科学院生態環境研究中心と中国科学院上海植物生理研究所とで計2回、それから北京環境科学学会では、「東京の地下水問題」の講演を行

なった。それぞれ、私の日本語を通訳していただいた。予想以上に講演後の質問も活発で、もっと時間を取るべきであったと思った。

それからまた意外だったのは、上記の生態環境中心で、社会地球化学に異常な関心を寄せる中堅の生態学者浦漢昕副教授と高林副教授を発見したことである。私は HANYA & AKIYAMA:「The Essence of Sociogeochemistry」と AKIYAMA & HANYA:「A City & a System」の2論文を持参し、その内容を要約してレクチャーした。時間が少なかったため、どれだけその内容を伝えることができたかには疑問があるが、これからの環境問題を扱うには、自然科学と社会科学を総合した学問の建設が必要であり、それへの第1歩としても社会地球化学を位置付けようとしていることは理解されたと確信している。浦副教授は、北京の後背地の植物生態における人間活動の影響を研究していたが、生態系における人間社会の位置付けに大きな興味をもち、それについてすでに中国語の論文も発表していた。生態環境研究中心所長庄亜輝教授の言によれば、浦副教授が中心となって、1990年に自然科学と社会科学との総合に関するシンポジウムを北京で開催する予定だとのことで、その際は、是非上記2論文の共著者である秋山紀子博士同道で参加するよう要請された。

北京の環境問題については、講演会の時のほか、別に北京市環境保護観測中心総工程師(高級技師)呉鵬鳴女史を訪ね、大気汚染、水質汚染、都市水の欠乏などについて実情を勉強した。私の勘に過ぎないが、北京は今後一層の深刻な環境問題に直面しそうである。

また、北京大学に程万里教授(北京大学に交換

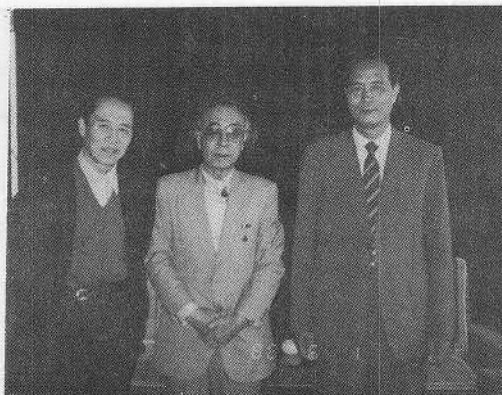
教授として講義を行った柴田徳衛東京経済大学教授の紹介による)を訪ね、市民生活についていろいろな情報を得た。単に為替レートを使って比較すれば、確かに中国では、個人所得はきわめて低い。しかし、物的な潜在的資源の所有量から見れば、中国は実に豊富である。それを思うと物的資源の基盤を持たない日本の経済成長によく分らない不安を覚えた。

また北京では、観光として、故宮博物館、夏宮殿、十三陵、万里の長城などを案内された。

第一感は、日本の文化の源泉はその殆どが中国にあったということである。それはまた論じるとして、休日でもないのに人出の多いことには全く驚かされる。それから市街に自転車の多いことは聞いていたので、成程と感じただけであるが、予想より自動車が多く、朝夕にラッシュが出現するのにはまた驚いた。それから、歩行者や自転車が、威張っていて信号を余り重視せず、自動車にも遠慮しないのは何となく感心してしまった。

上海では、中国科学院植物生理研究所の余叔文教授に、研究の紹介から観光に至るまで、何から何までお世話になった。同教授の研究室のホテイアオイなどの植物による水質浄化、酸化窒素の植物への影響も興味深かった。社会地球化学についても、レクチャーのあとその発展をおおいに期待

された。また中国科学院昆虫研究所にも同道され副所長劉維徳先生の案内で環境関係を含め多くの最新の研究を知ることができた。それから短時間ではあったが、上海市当局の高級工程師の紫錫賢・石厚民両氏から水質浄化の現場を案内された。上海は私にとって親しみやすい町だったが、人の多いのにはまた驚かされた。



中国科学院上海植物生理研究所にて
左から余教授・筆者・沈教授(所長)

11日間の今回の旅行は、本当に新鮮であった。また中国の方々から与えられた心からの歓迎を忘れることはできない。中国の皆さんは日本との共同研究を熱望しているようである。それにどう答えられるかが私の新しい宿題となった。

第18回理事会議事録

日時：1988年6月9日(休) 14:00～17:00

場所：一ツ橋学会館 309号室

出席者：会長 橋口隆吉

理事 有山兼孝 弥永昌吉 神原 周

窪田雅男 坂部知平 春原 亘

和達清夫

以上のほか委任状提出出席 19名

1. 本年度総会(7/15)に提出する議案の審議

- (1) 昭和62年度事業報告書(案)及び昭和63年度事業計画(案)——会長により説明後、質疑・

意見交換、一部字句修正ののち総会に提出を決定。

- (2) 昭和62年度収支決算書(案)及び昭和63年度収支予算書(案)——窪田理事から報告・説明があり、表記方法について若干の意見交換ののち総会に提出を決定。

2. 財政強化委員会の活動報告

各委員の働きかけにより新規賛助会員の加入及び寄附5件が得られたとの報告があった。今後も引続き入会の可能性のありそうな企業その他に協力を呼び掛けて行くこととなった。

3. 山西省科学技術委員会訪日団について

山西省科学技術委員会より“農業用フィルム

製造技術と廃膜再生産技術考察団”の訪日に対し受入れ先として訪問先の紹介・連絡その他を行うよう依頼があった。

とりあえず、訪日を歓迎する旨の招待状を送し、今後は神原先生が会長を務める(社)日本合成樹脂協会のご協力を迎ぎながら、先方とも連絡を取り合って進めていくことになった。

第19回理事会議事録

日時：1988年7月15日(金) 13:00～14:00

場所：一ツ橋学会館 302号室

出席者：会長 橋口隆吉

理事 弥永昌吉 窪田雅男 坂部知平

春原 亘 竹山太郎 平井 敦

向坊 隆

監事 菅野昌義

以上のほか委任状提出出席19名

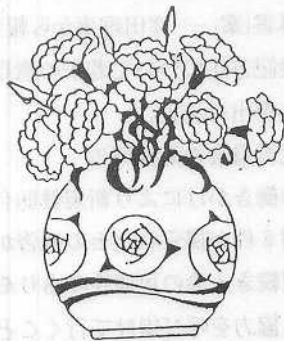
1. 総会運営について

(1) a: 会員総数340名に対し、委任状提出を含め、出席193名の見込み。

b: 議長は橋口会長を予定する。

(2) 第1号議案：会長説明と窪田理事報告により総会提案を行う。

(3) 第2号議案：会長説明と窪田理事報告により総会提案を行う。



第9回幹事会議事メモ

日時：1988年4月21日(木) 15:30～18:00

場所：一ツ橋学会館 309号室

出席者：委員長 橋口隆吉

委員 小川智哉 上坪宏道 窪田雅男

1. 第1回財政強化委員会報告
2. 6月(第18回)理事会議題の検討
 - 総会運営
 - 決算案
 - 予算案
3. 新任理事委嘱についての検討
4. 会費未納者の取扱いについて

第10回幹事会議事メモ

日時：1988年8月4日(木) 17:00～20:30

場所：一ツ橋学会館 308号室

出席者：委員長 橋口隆吉

委員 小川智哉 窪田雅男 坂部知平

鈴木昭憲 春原 亘 土屋喜一

1. 9月(第20回)理事会にかける新任理事委嘱の予備検討
2. 新会員増募の推進
3. 訪日団受入れ
 - ①山西省科学技術委員会派遣訪日団
 - ②中国科学技術交流中心派遣訪日団
 - ③湖南省对外科技交流中心派遣訪日団
 - ④中国科学院上海有機化学研究所派遣訪日団
4. 訪中団紹介
 - ①日本胡麻学会派遣 日中胡麻開発交流訪中代表団
5. 酸化物高温超電導シンポジウム
6. 来年度開催シンポジウム計画
7. 野上茂吉郎記念交流基金 第2回中国人留学生研究奨励金受領候補者への応募状況

最近の中国科学技術の動向

〔配列：事項見出、(中国通信掲載頁、発信地、発信月日)の順〕

- ①宋健国家科学技術委主任、ハイテクの国際進出強調 8, 11-3, 北京8, 6)
- ②高空科学技術気球システム確立 宇宙観測で重要な成果 (8, 15-13, 北京8, 10)
- ③中国、地震予知システム確立 (8, 16-12, 北京8, 13)
- ④中国制御核融合が新たな水準に (8, 11-9, 成都8, 8)
- ⑤カナス湖で「怪魚」の調査 (8, 10-15, ウルムチ8, 6)
- ⑥中国、科学探測・技術試験衛星打ち上げ、西独の実験装置積む (8, 11-6, 北京8, 5)
- ⑦来年、北京で国際宇宙会議・宇宙技術展 (8, 11-18, 北京8, 8)
- ⑧徐志堅局長が標準化法案説明 (9, 5-4, 北京8, 29)
- ⑨当面の物価対策・市場安定に関する決定を採択 国務院第20回常務会議 (9, 2-5, 北京8, 30)
- ⑩200万トンの目標実現めざす 中国非鉄金属工業総公司 (9, 13-8, 北京9, 8)
- ⑪解説：中国、沿海港湾建設に力こぶ、万トン級バース230、荷扱能力3億7千万トン (9, 22-3~5, 北京9, 20)
- ⑫中国、11土壤保全重点対策区を指定 (9, 16-7, 成都9, 6)
- ⑬中国、実用通信衛星3個打ち上げへ、すでに6000余の衛星TV受信・中継局 (9, 26-5, 北京9, 19)
- ⑭研究成果8年で6万件、中国の科学技術事業、大きく発展 (9, 6-14, 北京8, 31)
- ⑮中国科学技術館開館 (9, 28-15, 北京9, 22)
- ⑯先進水準の中性子発生装置開発 (9, 2-8, 蘭州8, 28)
- ⑰中国、地震予報発表規定を公布、新華社が統一して報道 (9, 16-8, 北京9, 3)
- ⑱洛陽で侵襲性大腸菌の人工交雑に成功 (9, 1-11, 済南8, 28)
- ⑲羊の成長ホルモン遺伝子を分離 世界で初めて (9, 22-12, 昆明9, 15)
- ⑳早期肝硬変は治ゆ率100% 肝臓病の新療法開発 (9, 26-11, 西安9, 21)
- ㉑中国、初の気象衛星打ち上げに成功 国務院・中央軍事委が祝電 (9, 9-2, 北京9, 7)
- ㉒中国の工業経済力大幅に伸びる 生産額'78年の2.74倍 (10, 3-4, 北京9, 29)
- ㉓異常ヘモグロビン症研究で世界的水準 ヒト骨髄種の細胞系培養に成功 (10, 4-10, ウルムチ10, 1)
- ㉔中国の重点建設10年の成果 (10, 5-9, 北京10, 1)
- ㉕ロケット水中発射原潜建造の道 新華社ルポ (10, 6-5~8, 北京9, 27)
- ㉖吉林省で大油田発見、遼河~鞍山油送管完成、大慶油田、随伴ガスで発電 (10, 11-6, 北京9, 30, 10, 4, 10, 2)
- ㉗中華人民共和国道路交通管理条例 (10, 12-8)
- ㉘新技術開発に優遇策 中国の税務・物価官庁 (10, 14-12, 北京10, 11)
- ㉙陳創天氏らが受賞 第3世界科学アカデミー賞 (10, 14-15, ローマ10, 9)
- ㉚肺ガン診断の新技術開発・劇症肝炎に画期的治療法 (10, 17-14, 蘭州10, 9, 南京10, 7)
- ㉛中国・国家公務員任免 (10, 18-17, 北京10, 13)
- ㉜新期国務院学位委員会発足 主任委員に何東昌氏 (10, 18-19, 北京10, 7)
- ㉝中国国務院、化学肥料、農薬、農業用フィルムの特許制決定、来年1月から実施 (10, 19-2, 北京10, 13)
- ㉞中国、冷中性子源装置を開発、アジアで初めて (10, 19-10, 北京10, 17)

<会 告>

◎野上茂吉郎記念交流基金第2回中国人留学生研究奨励金について

◎酸化物高Tc超電導材料

日中シンポジウム

- 日 時：1989年4月10日(月)～11日(火)
- 場 所：つくば市・科学技術庁研究交流センター
- 主 催：日中科学技術交流協会
中国科学院
- 共 催：科学技術庁金属材料技術研究所
- 参加費：検討中(大学・国公立研究所関係者は5,000円程度, 産業界関係者は10,000円程度)
- 講演方式：中国側14名は全員招待講演, 日本側は中国側に見合う内容・人数の招待講演者を検討中。その他の日本人参加者は準備討論, 自由討論を行う。
- プログラムの概要と中国側講演者(日本側講演者は人選中)
 - セッションⅠ 開会講演
李林 (Li Lin)
 - セッションⅡ 合成と構造
方俊人(Fan Jun Ren), 梁敬魁(Liang Jing Kui)
吳曉祖(Wu Xiao Zu), 嚴易峰(Yan Yi Feng)
 - セッションⅢ 電頭組織と物性
李方華(Li Fang Hua), 趙忠賢(Zhao Zhong Xian)
陳兆甲(Chen Zhao Jia), 王業寧(Wang Ye Ning)
 - セッションⅣ 薄膜, 線材
周鈞銘 (Zhou Jun Ming), 戴遠東 (Dai Yuan Dong), 王世光 (Wang Shi Guang), 吳培亨 (Wu Pei Heng), 謝雷鳴 (Xie Lei Ming)
- シンポジウム事務局：日中科学技術交流協会
〒113 東京都文京区湯島1-7-11 南進ビル6F
TEL: 03-815-7241, Fax: 03-815-7242
- 詳細プログラムが近日できる予定です。希望者は事務局にお申し込み下さい。

本協会では、標記奨励金の受領候補者募集を行って来ましたが、9月30日の推薦受付メ切りまでに7名の候補者の応募がありました。

候補者の専門分野は、精密工学・物質工学・物理工学・物理・電子工学・都市工学・地震発生機構と多岐にわたり、昨年に引続き高い水準の日本留学中の業績が寄せられました。

現在、理事を中心とする審査委員が個別に審査に当り、11月中旬の選考委員会で受領者が選出され、12月上旬に贈呈式が行われる予定になっております。

目 次

昭和63年度定期(第13回)総会開催報告	1
日中科学技術交流協会創立10周年記念 日本-中国生物科学シンポジウム 「分子レベルにおける生体機能の調節・ 制御」	1
また行ってみたい中国	山崎 真狩…… 2
中国の誘電材料学瞥見	池田 拓郎…… 4
生物学訪中記	柴谷 篤弘…… 6
社会地球化学交流の旅	半谷 高久…… 8
第18回理事会議事録	9
第19回理事会議事録	10
第9回幹事会議事メモ	10
第10回幹事会議事メモ	10
最近の中国科学技術の動向	11
<会 告>	
酸化物高Tc超電導材料日中シンポジウム	12
野上基金第2回研究奨励金について	12